

Title	Après toutの機能分析
Author(s)	川北, 恭子
Citation	大阪外国語大学論集. 2007, 34, p. 37-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79996
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Après tout の機能分析

川北 恭子

L'analyse de la fonction d'*après tout*

KAWAKITA-ANJO Yasuko

Le présent article a pour but de mettre en lumière la fonction d'*après tout*. Les études existantes sur ce connecteur ne sont pas du même avis ni ne donnent d'explication globale sur ses fonctions.

Nous avons choisi comme corpus des romans français modernes dans le souci d'extraire le rapport entre la masse de sens qui précède *après tout* et celle qui le suit, qu'elles soient explicites ou implicites. Pour ce faire, d'abord nous avons examiné toutes les occurrences d'*après tout* apparaissant dans notre corpus, et à travers leur analyse, nous montrons l'implicite de l'énoncé précédent et celui de l'énoncé suivant de chaque exemple, ensuite nous arrivons à les comparer horizontalement élément par élément. Enfin, nous dégagons la fonction commune aux exemples.

Notre analyse révèle ce qui suit : le contexte précédant *après tout* comporte implicitement une question dont la réponse est oui ou non, le choix est fait et justifié par l'énoncé suivant mais ce choix n'est pas explicitement montré. *Après tout* a pour fonction de montrer implicitement le résultat du choix et de le justifier par l'énoncé suivant. De plus, s'y ajoute le fait qu'il y a deux types d'*après tout*. D'une part, l'énoncé suivant justifie ou renforce le choix sous-jacent évoqué par l'énoncé précédent (type co-orienté). D'autre part, l'énoncé suivant, démentant ou réduisant à néant le choix sous-jacent déjà évoqué par l'énoncé précédent, justifie l'autre choix (type anti-orienté).

Notre approche s'appuyant sur des données positives permet de bien démontrer la nécessité de l'explicitation de l'implicite.

1. はじめに

本稿の目的は、*après tout* (以後、ATと略記)の現象そのものの実態把握を通じて、その機能を実証的に明かし、機能の包括的説明を行うことである。

ATを扱ったモノグラフィーには Roulet (1990) および Rossari & Paillard (2005) が

あり、言及しているものには Brockway (1982), Jayez (1983), Roulet (1987, 1990), Nøjgaard (1992), Grieve (1996) があるが、既に川北 (2003) で考察したように、それらでは各論者一致した見解は見出せない⁽¹⁾。また、AT の様々な用例の包括的説明にも至っていない。その最大の理由は、各論者は例文解釈を通して AT の機能を探っているが、その解釈の際に、AT の直前直後を含めた背後に隠れている暗黙の発話・思考を前提に分析しているにもかかわらず、これを暗黙のままにして無意識に用い、正面から論ずることなく、それぞれ各自の分析を進めていることにある。この先行研究の方法論上の問題点を踏まえて、本稿では、暗黙の部分を意識化させ明らかにするために、具体的文脈の下で「経験則」および「推意」を明示した上で、分析過程を詳細に記述し AT の機能を統一的に説明する方法を採る。これによって、分析結果の妥当性を検証可能にし、論者間の議論をかみ合わせ、よって類似する連結詞の相違点説明と総合的説明に資するものと思われる。

AT には推論が関わっており、AT は、この推論から得られた結論である推意（上述の暗黙の発話・思考に相当する。）と後件との関係を示しながら、前後の発話を表面上連結していると考えられる⁽²⁾。この考え方に立脚するならば、AT の機能分析を行うためには推意を明示する必要がある、推意の明示のためには適用される経験則の限定が必要である。経験則は無数にあり、文脈や言語外情報に依存しており、選択される経験則が異なれば推意も当然異なってくる。しかし、具体的かつ詳細な特定の限定された文脈や状況ないしは言語外情報が与えられれば、相当程度経験則が限定され、ひいてはこの適用から導き出される具体的推意の範囲も限定される。そうだとすれば、これを横断的に観察・分析することで、AT の機能の抽出ができるものと思われる。このため、コーパスとして、最初から具体的かつ詳細な文脈が与えられているものを採用する必要がある。

次章以降は以下の通りに論を進める。

2. ではコーパスと分析手順を述べる。3. では例文分析を行うことにより、横断的検討から機能抽出をし、仮説を立てる。そして、仮説に基づいて各例文を再解釈し、AT の機能を提示する。4. では、筆者が提示した見解と AT の先行研究の見解とを比較する。5. で全体のまとめとする。

2. コーパスと分析手順

2.1. コーパス

では、具体的かつ詳細な文脈が与えられているコーパスとは何か。

小説こそ最も具体的かつ詳細な文脈を得ることのできる素材の一つである、と考える⁽³⁾。社会階層の差を無視し、現代の不特定多数の一般大衆を対象にした小説は、特別の知識が無くとも内容が理解可能であるように書かれている。このことは、分析者が経験則を用いて容易に推論し分析できることと、第三者が分析者の分析過程を容易に検証することができることを示す。従って、一般大衆向け小説はコーパスとして適切であると考えられる。

一方、分析者による個々の作例では、具体的かつ詳細な限定された文脈や状況を設定す

ることが困難であり、インフォーマントによる推論と分析者による推論が乖離する危険性が大きいことは、既に川北(2004)で指摘したとおりである。また、口頭での出現例は、安定していないという指摘⁽⁴⁾もあるように、類似する連結詞の相違解明の一端となっている本研究の趣旨にそぐわない。

今回コーパスとして用いた5小説中⁽⁵⁾の全ての出現例を観察・分析し、例ごとにATが表す関係を示す。その分析の際には、1.で述べたように、暗黙にとどまっている部分を意識化させ、記述していく。ここで重要なことは、ある一定の母集団の中での出現例を全てデータとして挙げ、分析することである。機能に関してある予測を立て、その予測に合致する例を小説や新聞等から採集し、分析・論証を組み立てていく方法では、実態と乖離してしまう恐れがある。また、無作為に例を採集する場合は、その取捨選択された例自体が典型例なのか特殊例なのか個人特有の使用例なのかが不明である。フランス語を母国語とせず習得・教授する者としては、ATの典型例、主要な用法を知ることがまず重要であると考えられる。

2.2. 分析手順

前章でも述べたように、本稿では次の点を前提に分析を進めている。

当該連結詞に至るまでの文脈や言語外情報が明確であれば、そこで想起される経験則を基にして行われている推論が限定され、連結詞の背後に隠れている推意はおのずと明らかになる。当該連結詞の機能や意味に対する先入観を排除するためには、その連結詞の意味自体が不明なものとして、その連結詞の先行発話および後続発話を解釈する必要がある。連結詞は、連結詞の前件と後件との関係、つまり連結詞に先行する明示的あるいは非明示的意味と後続の明示的あるいは非明示的意味との関係を示すものである。

分析上重要な役割を果たしている「推論」および「経験則」について簡単に触れておきたい⁽⁶⁾。

推論 = 主体(話し手や書き手)がある事象に遭遇すると同時に、あるいは思考・発話・記述をなすと同時に、特定の経験則が想起され、その経験則がその事象・思考・発話・記述に適用されて、何らかの結論である推意が引き出される作用(過程)である。

経験則 = 経験・伝聞・学習などによって得た事柄であり、法則的、当為的、信念的なものがあり、一般知識、諺、慣習、道徳、迷信などもこれに属する。話者が自然に関連付ける経験則は、一般に共有されている経験則であるという前提に立っている。

以上を踏まえて、分析手順は以下の通りである。

まず、ATが出現している文の前後を数行引用する。

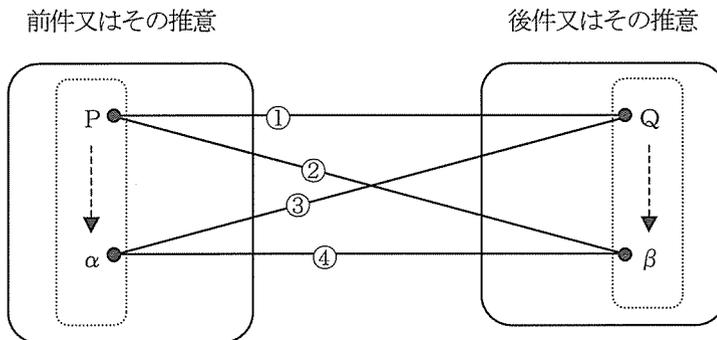
既に述べたように、ATが出現するまでの文脈や言語外情報を明確にする必要があるが、全てを引用することは紙幅の都合上不可能であるため、引用文は数行となっている。そのため、その引用箇所に至るまでの文脈および言語外情報を総合して「C」として書いておく。

次に、C を踏まえて引用箇所（連結詞の先行談話）を解釈しながら、AT の直前の先行発話 X⁽⁷⁾ に至る。X の表意 P⁽⁸⁾ から導かれる推意 α を明らかにする。また、この推意 α が導かれる際に参照された経験則 RE1 も明示する。同様に、AT の直後の後続発話 Y の表意 Q から導かれる推意 β を明らかにし、この推意 β が導かれる際に参照された経験則 RE2 も明示する⁽⁹⁾。

次に、当該連結詞が先行する何と後続する何を連結しているかを明らかにするために、表意 P、表意 Q、推意 α 、推意 β のそれぞれの関係を検討する。そもそも AT を挿入して P と Q が関連付けられ理解されていたのであるから、AT を削除した場合の P と Q、P と β 、 α と Q、 α と β の関連付けおよびその内容を検討することは、AT の機能把握に役立つと考えられる。ここでいう関係とは、当該文脈ないし談話における関係であり、例えば P と Q を因果関係で繋げることができる、あるいは逆接的關係⁽¹⁰⁾で繋げることができる、等が考えられる。なお、本稿では、因果関係も補足的・添加的・並列的關係も順接的關係に含めて考えることにする。順に、①表意間の関係である P と Q の関係、②前件の表意 P と後件の推意 β の関係、③前件の推意 α と後件の表意 Q の関係、④推意間の関係である α と β の関係、を検討する。

その後、各例文から導き出された関連内容（例えば、P と Q とは順接的に繋がっている。）について、横断的に比較・検討することによって、AT の機能の仮説を立てる。

最後に、その仮説を前提にして各例文を再解釈する。



以上の分析手順における分析道具を以下のように定義づけておく。

C = 先行文脈

X = AT の直前にある先行発話

P = X の表意

RE1 = P 又は P に密接に関連する事象に適用される経験則

α = RE1 の P 又は P に密接に関連する事象への適用により導き出された推意

Y = AT の直後にある後続発話

Q = Y の表意

RE2 = Q 又は Q に密接に関連する事象に適用される経験則

β = RE2 の Q 又は Q に密接に関連する事象への適用により導き出された推意

このように先行談話の要素をできる限り機械的に細分化し、各例における無意識の推論過程及び推意を明らかにすることによって、筆者が当該連結詞の機能をどのように導いたかを示すことができる。これにより、従来分析者が分析過程で暗黙のままにしてきた推論過程及び推意を筆者 (= 分析者) と第三者とが共有することができ、研究者間において、より広範囲の共通の基礎資料に基づいた分析が可能となろう。

なお、以下の場合には、以下にあげる理由により、分析上適格性がないものと判断し、分析対象から除外した。

① AT が他の連結詞 (et や mais 等) と共起している場合について、et や mais 等の連結詞の影響を受けて解釈してしまう可能性があり、AT 自体の機能なのかどうか定かではないため除外した⁽¹¹⁾。

② 表記上、「X AT Y」の X が Y と同一主体の会話内や思考内に無い場合について、X を文脈ないし談話から想像するしかないため除外した⁽¹²⁾。

5 小説中における AT の出現回数及び上記により除外した数は以下の通りである。

BT : 6 回 (内 4 回除外), FG : 4 回 (内 1 回除外), QF : 8 回, CM : 3 回,

DB : 2 回 (内 1 回除外),

従って、17 例を分析上適格性があるものとした。

3. 分析

17 例を分析した結果を先取りして述べれば、先行発話 X の先行文脈ないし先行談話では、常に何らかの対立がある。AT は、表層上、AT の前後が順接的關係か逆接的關係かという 2 つの矛盾するタイプがあるように見えるが、それらは矛盾するわけではなく、「対立する選択肢の選択結果を明示せずして、後続発話 Y がその選択結果を示す」という一貫した機能を持っている。

では、以下で具体的に例文を分析していく⁽¹³⁾。

3.1. 分析

3.1.1.

(1) « J'aimerais que vous donniez quelques conseils avisés à votre fille, Raymond. Je l'ai trouvée dans le bois de pins avec Cyril, ce soir, et ils semblaient du dernier bien.»

Mon père essaya de prendre cela à la plaisanterie, le pauvre :

« Que me dites-vous là? Que faisaient-ils?

- Je l'embrassais, criai-je avec ardeur. Anne a cru...

- Je n'ai rien cru du tout, coupa-t-elle. Mais je crois qu'il serait bon qu'elle cesse

de le voir quelque temps et qu'elle travaille un peu sa philosophie.

- La pauvre petite, dit mon père... Ce Cyril est gentil garçon, après tout ?

-Cécile est aussi une gentille petite fille, dit Anne. C'est pourquoi je serais navrée qu'il lui arrive un accident. Et étant donné la liberté complète qu'elle a ici, la compagnie constante de ce garçon et leur désœuvrement, cela me paraît inévitable. Pas vous? »

(BT, p.62)

まず、分析の前提となるものを列挙しておく。

C = 父親は、妻を亡くしてから自由な独身生活を楽しみ、娘セシルを愛してはいるが放任し自由にさせている。婚約者アンヌには、娘の教育について信頼を置いている。アンヌが、セシルとその男友達シリルとのデートを目撃し、父親に娘セシルに忠告するよう促す。

P = セシルは可哀そうである。(← X = La pauvre petite)

Q = ボーイフレンドのシリルは優しい子である。(← Y = Ce Cyril est gentil garçon)

上記 C を踏まえて P の先行談話を解釈する。

婚約者アンヌはセシルとシリルのデートを目撃したことから、娘セシルに対して忠告を与えるよう、父親に促した。しかし、父親は、娘セシルを直接庇う言葉（例：「大したことはない」「いいじゃないか」等）を言わずに、アンヌの発言を冗談に受け止めようとした。この事実と、元来父親が放任主義であり娘セシルを今まで自由に過ごさせていることから、父親がセシルを従来どおり自由にさせてあげたいと思っており、お説教もしたくない、ということが推察される。

他方、父親は、娘セシルが寄宿舎を出た後しばらく娘をアンヌの元に預けていることから、父親はアンヌに対して絶大な信頼を置いていることが分かる。ようやく身を固め結婚を決意した父親は、信頼を置き婚約者でもあるアンヌの意見に直接逆らうことはできないという実情がある。

以上のように、父親の娘セシルを庇いたい気持ちと、婚約者アンヌの真面目な意見に逆らうのを避けたい気持ちとが錯綜していると考えられる。その結果、アンヌの発言に戸惑い、冗談に取ろうとした、と推察される。

そして、更なるアンヌの忠告（シリルに会わないで哲学の勉強をした方が良い）を耳にした父親は、もしアンヌの忠告に従うと、娘セシルは自由な生活を続けることができなくなる、シリルと付き合い合うことができなくなってしまう、と考える。

以上から、P の先行談話に、娘セシルの自由な生活を守るか婚約者で信頼を置くアンヌの立場を尊重するか父親の心の葛藤、「娘セシルはシリルと付き合いっても良いかどうか」という父親の自問とその問いに対する父親の相反する 2 重の気持ち、「セシルはシリルと付き合える」と「セシルはシリルと付き合えない」との対立があると考えられる。

問い = 「娘セシルはシシルと付き合っても良いかどうか」

対立項 = 「セシルはシシルと付き合える」 \Leftrightarrow 「シシルと付き合えない」

では、Pからはどのような推意 α が導かれるか。

上記のような先行談話を背景にすると、父親は、このPと同時に無意識に特定の経験則 RE1「可哀そうであるのは、女の子が自由にボーイフレンドと付き合うことができないからである。」を想起し、Pに適用することによって、「セシルよ、可哀そうに。もうシシルと付き合えないなんて。」と思う。即ち、「セシルはシシルと付き合えない」という推意 α が得られる。この α は上述の対立項の1つである。

では、Qからはどのような推意 β が導かれるか。

父親は「ボーフレンドのシシルは優しい子である。」と言うと同時に「ボーイフレンドが優しい子ならば、女の子は付き合っても問題はない。」という経験則 RE2を想起し、Qに適用することによって、「シシルは優しい子である。だから、セシルは付き合っても問題はない。」と思う。即ち、「セシルはシシルと付き合える」という推意 β が得られる。この β は上述の対立項の1つである。

以上より、次のように整理できる。

RE1 = 可哀そうであるのは、女の子が自由にボーイフレンドと付き合うことができないからである。(「女の子が自由にボーイフレンドと付き合うことができないならば、可哀そうである」という経験則から派生する経験則)

α = セシルはシシルと付き合えない。

RE2 = ボーイフレンドが優しい子ならば、女の子はそのボーイフレンドと付き合っても問題はない。

β = セシルはシシルと付き合える。

次に、当該談話を背景にしてそれぞれの関係を検討する。

① PとQの関係

PとQを関連付けるためには、次のような想定が自然であろう。

「セシルは可哀そうである。何故ならば、シシルと付き合えないから。いや、シシルと付き合える。何故ならば、ボーイフレンドのシシルは優しい子であるから。」

この場合、下線部分 α と β の媒介により、PとQは関連付けられている。従って、Pから得られる推意 α とQから得られる推意 β が相容れない対立関係にあるため、PとQは α 及び β を媒介にして逆接的關係にあると言える。

② Pと β の関係

Pと β を関連付けるためには、次のような想定が自然であろう。

「セシルは可哀そうである。何故ならば、シシルと付き合えないからである。いや、シシルと付き合える。」

この場合、下線部分 α の媒介により、P と β は関連付けられている。従って、 β が P から得られる推意 α と対立関係にあるため、P と β は α を媒介にして逆接的關係にあると言える。

③ α と Q の関係

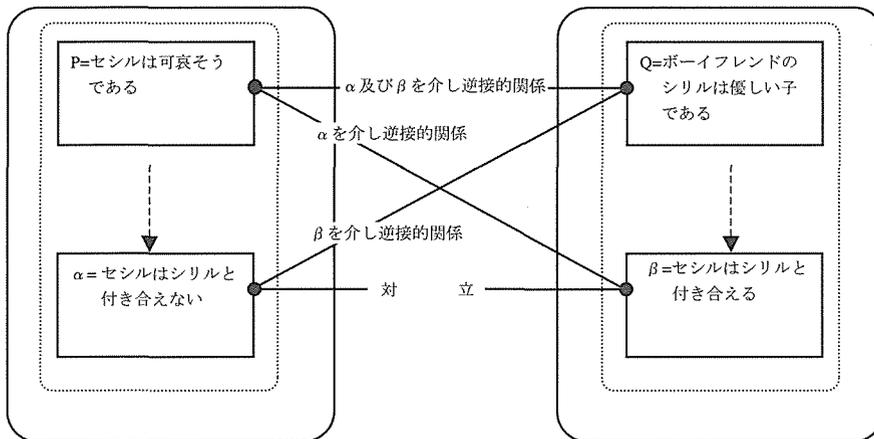
α と Q を関連付けるためには、次のような想定が自然であろう。

「セシルはシリルと付き合えない。いや、シリルと付き合える。何故ならば、ボーイフレンドのシリルは優しい子であるから。」

この場合、下線部分 β の媒介により、 α と Q は関連付けられている。従って、 α が Q から得られる推意 β と対立関係にあるため、 α と Q は β を媒介にして逆接的關係にあると言える。

④ α と β の関係

「セシルはシリルと付き合えない。」と「セシルはシリルと付き合える。」は対立であるので、 α と β は逆接的關係と言える。



3. 1. 2.

(2) Et mes efforts pour être gentille, le comprendre, partager ses goûts, je ne les ménageais pas. Tout ce que je me suis avalé pour communiquer vraiment avec lui, eux, le jazz, la peinture moderne, même les cris d'oiseaux d'un ornithologue, même le pélé de Chartres, prières et pieds écorchés, pour un catho. Faire plaisir. Après tout qu'est-ce que ça peut faire d'aller voir El Perdido plutôt que L'Année dernière à Marienbad, il a le droit d'aimer les westerns, j'irai voir Resnais sans lui. (FG, p.104)

まず、分析の前提となるものを列挙しておく。

C = 高校生の「私」は、結婚をしないということと、男に媚びず、信頼と平等の関係でいられる男性とだけ付き合おうと決心する。そのような関係でいられる男性は見つからず、男性の方は、誰かに似ているとかボードレールやヴェルレーヌの詩を使ったりして気を引こうとするが、女性を1人の人間として理解しようとしているわけではない。

P = 私は彼を喜ばせたかった。(← X = Faire plaisir.)

Q = 私の好きな映画『去年マリエンバートで』ではなく、彼の好きなウェスタン映画『ならず者一家』を観ることにしてもどうってことはない。

(← Y = qu'est-ce que ça peut faire d'aller voir *El Perdido* plutôt que *L'Année dernière à Marienbad*)

上記Cを踏まえて、Pの先行談話を解釈する。

表面的に女性の気を引こうとする男性を求めているのではないにもかかわらず、「私」は、そのような男性に対しても優しく振舞い、本当の意思疎通を図るために男性の興味関心に合わせる。男性の興味関心にあわせることは平等という自分の信条に合わないが、男性の興味関心に合わせる事が本当の意思疎通を図るためであれば、致し方ないのではないかと考えられる。

以上から、Pの先行談話に、「こんな私で良いのかどうか」という心の葛藤・自問があり、その問いに対して「これで良い」と「こんな私は良くない」の対立があると言える。

問い = 「(自分の信条に合わない行動をしてしまう私) こんな私で良いのかどうか」

対立項 = 「こんな私は良くない」 ⇔ 「これで良い」

では、Pからどのような推意 α が導かれるか。

「彼を喜ばせたかった。」ということは、自分の信条に合わないことなので、Pと同時に「自分の信条に合わないならば、良くない。」という経験則RE1が想起され、これがPすなわち「自分の信条に合わないこと」に適用され「こんな私は良くない」という推意 α が得られる。この α は、上記対立項の1つである。

では、Qからはどのような推意 β が導かれるか。

「私の好きな映画ではなく彼の好きな映画を見ること」は、瑣末な問題であるので、Qと同時に「瑣末な問題ならば、こだわる必要が無いので、これで良い。」という経験則RE2が想起され、これがQすなわち「瑣末な問題」に適用され、「私の好きな映画ではなく彼の好きな映画を見ることは、瑣末な問題であるので、こだわる必要がない。だから、これで良い。」と考え、「これで良い」という推意 β が得られる。この β は、上記対立項の1つである。

以上より、次のように整理できる。

RE 1 = 自分の信条に合わないならば、良くない。

α = こんな私は良くない。

RE 2 = 瑣末な問題ならば、こだわる必要が無いので、これで良い。

β = これで良い。

次に、それぞれの関係について当該談話を背景にして検討する。

① PとQの関係

PとQを関連付けるためには、次のように想定することが自然であろう。

「私は彼を喜ばせたかった。だから、こんな私は良くない。いや、これで良い。何故ならば、私の好きな映画『去年マリエンバートで』ではなく、彼の好きなウエスタン映画『ならず者一家』を観ることにしてもどうってことはないから。」

この場合、下線部分 α と β の媒介により、PとQは関連付けられている。従って、Pから得られる推意 α とQから得られる推意 β が相容れない対立関係にあるため、PとQは α 及び β を媒介にして逆接的關係にあると言える。

② Pと β の関係

Pと β を関連付けるためには、次のように想定することが自然であろう。

「私は彼を喜ばせたかった。だから、こんな私は良くない。いや、これで良い。」

この場合、下線部分 α の媒介により、Pと β は関連付けられている。従って、 β がPから得られる推意 α と対立関係にあるため、Pと β は α を媒介にして逆接的關係にあると言える。

③ α とQの関係

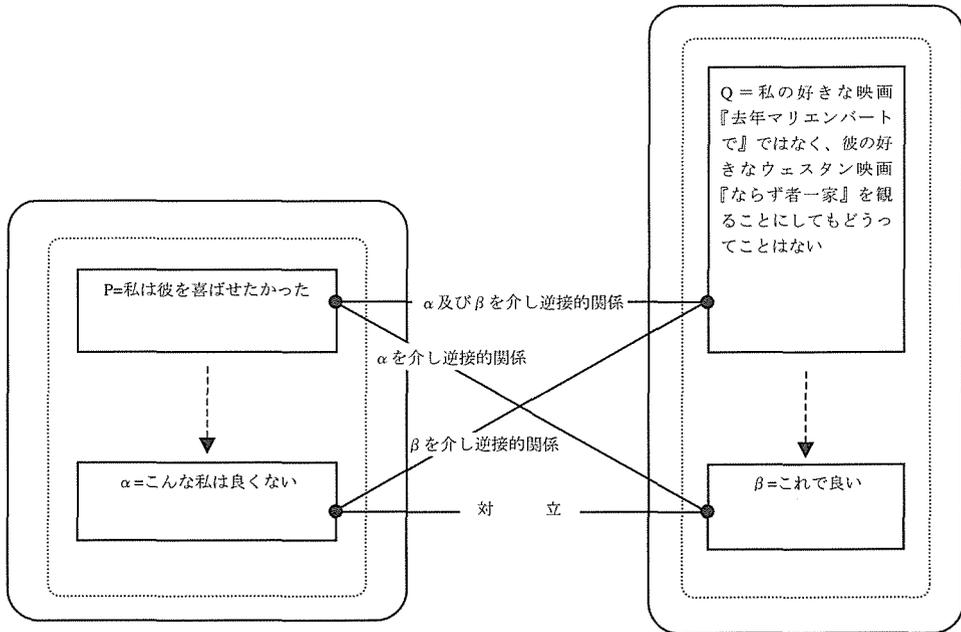
α とQを関連付けるためには、次のように想定することが自然であろう。

「こんな私は良くない。いや、これで良い。何故ならば、私の好きな映画『去年マリエンバートで』ではなく、彼の好きなウエスタン映画『ならず者一家』を観ることにしてもどうってことはないから。」

この場合、下線部分 β の媒介により、 α とQは関連付けられている。従って、 α がQから得られる推意 β と対立関係にあるため、 α とQは β を媒介にして逆接的關係にあると言える。

④ α と β の関係

「こんな私は良くない。」と「これで良い。」は対立であるので、 α と β は逆接的關係と言える。



3. 1. 3.

- (3) Ainsi donc, la grosse Jeanie est toujours là. C'est qu'elle doit nous aimer beaucoup. Je croyais, moi, qu'elle serait maligne et qu'elle s'en irait. Mais non. Elle reste. Elle a peut-être peur de se retrouver avec tous les flics du pays au cul. Et, avec son gros cul, ils risquent pas de la rater. Mais a-t-elle réfléchi qu'ils pourraient tout aussi bien venir la cueillir ici? Tranquillement. Après tout, qui la protégerait? Il suffirait qu'ils reçoivent une coupure de journal... Mais qui ferait ça? Ici, il n'y a que de bons garçons. Et une très vilaine Jeanie...
(QF, p51, Journal de l'assassin)

まず、分析の前提となるものを列挙しておく。

C = ジニーは逃走中の身で、身分を隠して家政婦としてマーチ家で働いている。偶然殺人者の日記を見つけてしまい、以来毎日日記を読み続けている。ある日、日記を読んでいるのではないかと殺人者に疑われているとジニーは知った。また、ジニーが以前泥棒を働いて新聞沙汰になっていることを示す新聞記事のコピーが、殺人者の日記に挟んであった。ジニーは、殺人者に自分の身元がばれていることを知りマーチ家から出て行こうとしたが、あいにく雪のため交通麻痺で出て行けなかった。結局あきらめてマーチ家に留まる。

P = 警察が悠々とジニー逮捕に隠れ家 (マーチ家) にやって来ること十分ありうる。(←

X = Tranquillement.)

Q = マーチ家の誰も ジニーを守らない。(← Y = qui la protégerait?)

上記 C を踏まえて P の先行談話を解釈する。

まず、殺人者はジニーがマーチ家から出て行くと思っていた。しかし、ジニーがマーチ家に留まっていることから、殺人者は、「ジニーは国中の警察から追われるのが怖いのかもしれない。あの大きいお尻だったら警察がジニーを見逃すわけがない。」と書く。このことから、殺人者が、自分の予想に反してジニーがマーチ家に留まる理由を、『動くことで警察に気づかれるのであれば、逃亡者ジニーにとっては、隠れ家（マーチ家）に留まる方が安全だと、ジニーが判断しているのだろう』と考えている、と理解される。ところが、殺人者は、この思考の後、引用箇所 2 つ目（4 行目）の Mais 以降で、そのジニーの判断が誤っていることを示唆する意見を提示する。「彼女は、警察がここに逮捕に来ることだって十分ありうるって考えたのだろうか。」と書いている。このことから、殺人者が、『警察がジニー逮捕のためにマーチ家に来る可能性が高い』と考えている、と理解される。よって、殺人者は、そのような意見を提示しながら、『警察がマーチ家に逮捕に来る可能性が高いならば、逃亡者ジニーにとってマーチ家に留まるよりも、逃げる方が安全だ』と考えていることが窺われる。

以上から、P の先行談話に、殺人者の「ジニーにとってマーチ家に留まった方が安全かどうか」という自問とそれについての相反する思考があると言える。つまり、以下の対立項を想定することができる。

問い = 「ジニーにとってマーチ家に留まった方が安全かどうか」

対立項 = 「ジニーにとって、逃げるよりマーチ家に留まる方が安全である」

⇔ 「ジニーにとって、マーチ家に留まるより逃げる方が安全である」

では、P からどのような推意 α が導かれるか。

この P と同時に「警察が隠れ家に逮捕にやって来る恐れがあるならば、逃亡者にとって隠れ家に留まるより、逃げた方が安全である。」という経験則 RE 1 が想起され、これが P に適用され、「警察が悠々と隠れ家（マーチ家）にジニー逮捕にやって来ることも十分ありうるならば、ジニーにとってマーチ家に留まるより逃げた方が安全である。」と推論し、「ジニーにとってマーチ家に留まるより逃げた方が安全である。」という推意 α が得られる。この α は、上記対立項の 1 つである。

では、Q からどのような推意 β が導かれるか。

殺人者は、Q と同時に「警察が隠れ家に逮捕にやって来た際に、その住人にかくまってもらえないのであれば、逃亡者にとって隠れ家に留まるより、逃げた方が安全である。」という経験則 RE 2 が想起され、これが Q に適用され、「マーチ家の住人の誰もジニーを守らないのであれば、ジニーにとってマーチ家に留まるより、逃げた方が安全である。」

と推論し、「ジニーにとって、マーチ家に留まるより逃げた方が安全である。」という推意 β が得られる。この β は、上記対立項の1つであり、かつ α と同一である。

以上は以下のように整理できる。

RE1 = 警察が隠れ家に逮捕にやって来る恐れがあるならば、逃亡者にとって隠れ家に留まるより、逃げた方が安全である。

α = ジニーにとって、マーチ家に留まるより逃げた方が安全である。

RE2 = 警察が隠れ家に逮捕にやって来た際に、その住人にかくまってもらえないのであれば、逃亡者にとって隠れ家に留まるより、逃げた方が安全である。

β = ジニーにとって、マーチ家に留まるより逃げた方が安全である。

次に、当該談話を背景にしてそれぞれの関係を検討する。

① PとQの関係

PとQを関連付けるためには、次のように想定するのが自然であろう。

「警察が悠々とジニー逮捕に隠れ家（マーチ家）にやって来ることも十分ありうる。だから、ジニーにとって、マーチ家に留まるより逃げた方が安全である。しかも、マーチ家の誰もジニーを守らない。だから、ジニーにとって、マーチ家に留まるより逃げた方が安全である。」

この場合、下線部分 α と β の媒介により、PとQは関連付けられている。従って、Pから得られる推意 α と Q から得られる推意 β が同一関係にあるため、PとQは α 及び β を媒介にして同じ結論を導く関係にあり、順接的關係にあると言える。

また、PとQの関係は、Qが直接Pを根拠付けているという解釈も可能である。つまり、「マーチ家の誰もジニーを守らないから、警察は悠々とジニー逮捕にマーチ家にやって来ることも十分ありうる。」という関係が想定可能である。

② Pと β の関係

Pと β を関連付けるためには、次のような因果関係を想定するのが自然であろう。

「警察が悠々とジニー逮捕に隠れ家（マーチ家）にやって来ることも十分ありうる。だから、ジニーにとって、マーチ家に留まるより逃げた方が安全である。」

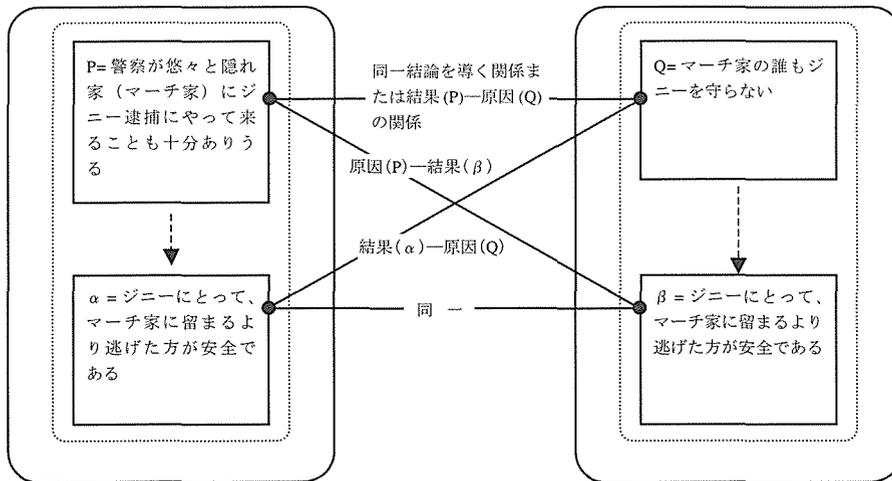
③ α とQの関係

α とQを関連付けるためには、次のような因果関係を想定するのが自然であろう。

「ジニーにとって、マーチ家に留まるより逃げた方が安全である。何故ならば、マーチ家の誰もジニーを守らないから。」

④ α と β の関係

同一関係。



3. 1. 4.

(4) David enfila la combinaison de nettoyage qui était un peu grande pour lui. Il s'était rasé pour faire bonne impression. Il enfonça la casquette sur sa tête, au ras des sourcils, de manière à ce que la visière dissimule le plus possible ses traits. Mokes lui avait donné une vieille montre au verre rayé, afin qu'il puisse se préparer à la venue de Dogstone. C'était une montre «Rodeo Man» pour enfant, avec un cadran orné d'un cheval dont la tête remuait pour marquer les secondes. David en avait possédé une semblable à douze ans. Il se demanda s'il fallait y voir un signe. Il la boucla à son poignet sans chercher à réfléchir davantage. Pour finir, il laça les chaussures de sécurité et assujettit le tube de cuir sur son épaule par la lanière qui faisait office de bandoulière. La présence de l'étui n'était guère gênante, en le voyant on pensait à quelque ustensile ménager. Après tout, les ramoneurs de New York ne transportaient-ils pas leurs brosses télescopiques dans de vieux sacs de golf ?

(CM, p.131~132)

まず、分析の前提となるものを列挙しておく。

C = ダヴィッドは、高校の教師であったが、教師という職業に嫌気がさしていたところ、ゴーストライターにならないかという誘いによって、教師を辞めた。ところが、うまくいかず結局浮浪者となってしまう、ビルの壁をよじ登り盗みを働く窃盗団に入ってしまう。仲間があるマンションに侵入を図るが、そのマンションの管理人のドッグストーンに殺されてしまう。仲間の復讐の任務を帯び、ドッグストーンが管理人をしているマンションに侵入するために、清掃作業員の一員に成りすます。

P = 革の筒を見られても何か家事用具と思われる。

(← X = en le voyant on pensait à quelque ustensile ménager.)

Q = ニューヨークの煙突掃除人たちは、古いゴルフバックの中に伸縮式ブラシを入れて持ち歩いている。(← Y = les ramoneurs de New York ne transportaient-ils pas leurs brosses télescopiques dans de vieux sacs de golf?)

上記 C を踏まえて P の先行談話を解釈する。

清掃作業員のスタッフの服装をしたダヴィッドが、偽の清掃作業員と見破られないように、良い印象を与えるために髭をそったり深く帽子をかぶったりすることから、疑われるのではないかと不安がっていると理解される。また、無口で気が弱く母親の言いなりになっていた少年時代に持っていた腕時計と同じものをボスから渡された時、何か前兆を感じるが、それ以上深く考えるのは止め、銃の入った革の筒を肩から掛けた。

以上から、「自分は大それたことをしようとしているが大丈夫かどうか。身分がばれないかどうか。疑われないかどうか。」という自問とその問いに対する「疑われる・ばれる」と「疑われない・ばれない」の対立があると推察される。

問い = 「清掃作業員として疑われないかどうか」

対立項 = 「疑われる」 ⇔ 「疑われない」

では、P からどのような推意 α が導かれるか。

この P と同時に「清掃作業員の服装をした人の持ち物が家事用具と思われるならば、清掃作業員の一人として疑われない。」という経験則 RE1 が想起され、これが P に適用され、「革の筒を見られても家事用具と思われるならば、清掃作業員の一人として疑われない」と思い、「自分は疑われない」という推意 α が得られる。この α は、上記対立項の 1 つである。

では、Q からどのような推意 β が導かれるか。

Q と同時に「その職業の恰好をしているならば、その職業の人と思われる。」という経験則 RE2 が想起され、Q に適用され、「ニューヨークの煙突掃除人たちは（煙突掃除に関係の無い）古いゴルフバックの中に伸縮式ブラシを入れて持ち歩いているが、煙突掃除人として疑われない。自分も（清掃用とは異質と思われるかもしれない）革の筒を持っているが清掃作業員の恰好をしているから、疑われない」となり、「自分は疑われない」という推意 β が得られる。この β は、上記対立項の 1 つであり、かつ α と同一である。

以上を整理すると以下のように纏められる。

RE 1 = 清掃作業員の服装をした人の持ち物が家事用具と思われるならば、清掃作業員の一人として疑われない。

α = 自分は疑われない。

RE 2 = その職業の恰好をしているならば、その職業の人と思われる。

β = 自分は疑われない。

次に、当該談話を背景にしてそれぞれの関係を検討する。

① PとQの関係

PとQを関連付けるためには、次のように想定するのが自然であろう。

「革の筒を見られても何か家事用具と思われる。だから、自分は疑われない。しかも、ニューヨークの煙突掃除人たちは、古いゴルフバックの中に伸縮式ブラシを入れて持ち歩いている。だから、自分は疑われない。」

この場合、下線部分 α と β の媒介により、PとQは関連付けられている。従って、Pから得られる推意 α とQから得られる推意 β が同一関係にあるため、PとQは α 及び β を媒介にして同じ結論を導く関係にあり、順接的關係にあると言える。

また、PとQの関係は、Qが直接Pを根拠付けているという解釈も可能である。つまり、「ニューヨークの煙突掃除人たちは、古いゴルフバックの中に伸縮式ブラシを入れて持ち歩いている。だから、革の筒を見られても何か家事用具と思われる。」という因果関係が想定可能である。

② Pと β の関係

Pと β を関連付けるためには、次のような因果関係を想定するのが自然であろう。

「革の筒を見られても何か家事用具と思われる。だから、自分は疑われない。」

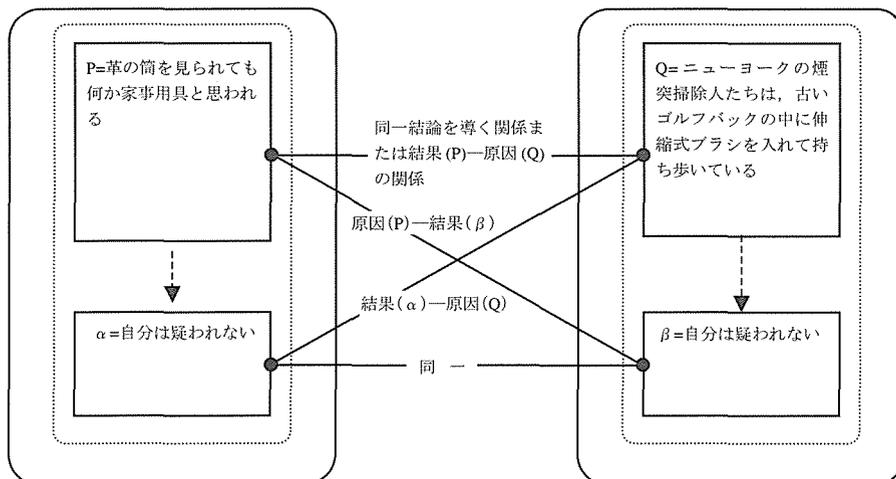
③ α とQの関係

α とQを関連付けるためには、次のような因果関係を想定するのが自然であろう。

「自分は疑われない。何故ならば、ニューヨークの煙突掃除人たちは、(煙突掃除に關係の無い)古いゴルフバックの中に伸縮式ブラシを入れて持ち歩いているから。」

④ α と β の関係

同一関係。



3. 1. 5.

- (5) Elle attend trois mois avant de rappeler le professeur. Il est absent - un dîner en ville. Quand elle évoque l'objet de son appel, sa mère s'écrie au téléphone : « Ah! Oui, l'argent..., toujours l'argent! »

(空白)

Plus tard, elle considère avec une philosophie toute hellénique son voyage dans les îles. Après tout ce n'est pas si grave : il y a un homme au monde qui lui doit quelque chose.

(DB, p.128)

まず、分析の前提となるものを列挙しておく。

C = ヴェカンスに、彼女は先生と一緒にキラデス諸島に出かけた。彼女は旅行に際して先生にお金を貸していた。3ヶ月で返してもらえる約束であったが、返してもらえないので、3ヶ月待ってから先生に電話した。

P = 後になって、彼女は諸島への旅行を極めてギリシャ哲学的に考えた。(← X = Plus tard, elle considère avec une philosophie toute hellénique son voyage dans les îles.)

Q = 貸したお金を返してもらえないことはそれ程大したことではない。(← Y = ce n'est pas si grave)

上記Cを踏まえてPの先行談話を解釈する。

彼女はお金を先生に貸す際、3ヶ月で返してもらう約束をしていた。ところが、3ヶ月待っても返してもらえないので、先生に催促の電話をしている。このことから、彼女が「貸したお金を返してもらおうのが当然である」と思っていることがわかる。しかし、電話をしても先生が留守で、電話口で応対した先生の母親に嫌味を言われる。このことと、発話Xの冒頭「Plus tard」に至るまでに空白部分があることから、Xに至るまでに、彼女の「今後再度催促すべきかどうか」「貸したお金を返してもらおうかどうか」という自問と、それに対する「貸したお金を返してもらおう」と「貸したお金を諦める」の対立がある、と推察される。

問い = 「貸したお金を返してもらおうかどうか」

対立項 = 「貸したお金を返してもらおう」 ⇔ 「貸したお金を諦める」

では、Pからどのような推意 α が導かれるか。

Pと同時に、「ギリシャ哲学的に考えるならば、欲にとらわれず理性的に物事を考える。」という経験則 RE1 が想起され、これがPに適用され、「後になって、彼女は諸島への旅行を極めてギリシャ哲学的に考えた。だから、欲にとらわれず理性的に物事を考え、お金を諦めた。」となり、「貸したお金を諦める」という推意 α が得られる。これは上述の対立項

の1つである。

では、Qからはどのような推意 β が導かれるか。

「貸したお金を返してもらえないこと」は瑣末な問題なので、Qと同時に、「瑣末な問題であるならば、こだわる必要が無い」という経験則 RE2 が想起され、これがQに適用され、「貸したお金を返してもらえないことは瑣末な問題であるので、こだわる必要が無い。だから、貸したお金を諦める。」となり、「貸したお金を諦める」という推意 β が得られる。これは上述の対立項の1つであり、かつ α と同一である。

以上を整理すると以下のように纏められる。

RE1 = ギリシャ哲学的に考えるならば、欲にとらわれず理性的に物事を考える。

α = 貸したお金を諦める。

RE2 = 瑣末な問題であるならば、こだわる必要が無い。

β = 貸したお金を諦める。

次に、当該談話を背景にしてそれぞれの関係を検討する。

① PとQの関係

PとQを関連付けるためには、次のように想定するのが自然であろう。

「後になって、彼女は諸島への旅行を極めてギリシャ哲学的に考えた。だから、彼女は貸したお金を諦める。しかも、貸したお金を返してもらえないことはそれ程大したことではない。だから、彼女は貸したお金を諦める。」

この場合、下線部分 α と β の媒介により、PとQは関連付けられている。従って、Pから得られる推意 α とQから得られる推意 β が同一関係にあるため、PとQは α 及び β という同一結論を導く関係にあり、順接的關係にあると言える。

② Pと β の関係

Pと β を関連付けるためには、次のような因果関係を想定するのが自然であろう。

「後になって、彼女は諸島への旅行を極めてギリシャ哲学的に考えた。だから、彼女は貸したお金を諦める。」

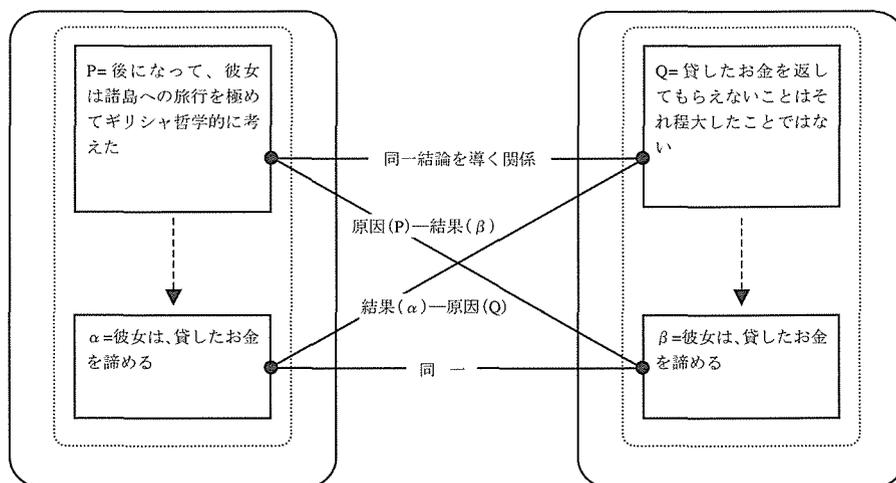
③ α とQの関係

α とQを関連付けるためには、次のような因果関係を想定するのが自然であろう。

「彼女は貸したお金を諦める。何故ならば、貸したお金を返してもらえないことはそれ程大したことではないから。」

④ α と β の関係

同一関係



3.2. 横断的検討から機能抽出へ

本節では、前節で検討した例文(1)から(5)の分析結果を比較することによって、それらに共通する最大公約数を抽出する。

まず例文(1)から(5)全てに共通なことを①②として挙げる。

- ① 例文(1)から(5)全てについて、Pの先行談話内に問いおよびそれに対する答えとなる対立する選択肢(対立項)がある。この点について、下に資料として挙げた他のコーパス全てについても例外なく当てはまる。
- ② 例文(1)から(5)全てについて、先行談話内の対立項のうちの1つが選択され、その選択結果は非明示であるが、Qがその選択結果を正当化している。この点についても、資料に挙げた他のコーパス全てについても例外なく当てはまる。

次に、(1)から(5)の内の一部に共通なことを③④として挙げる。

- ③ 例文(1)及び(2)については、先行談話内の対立項のうち選択されるのは、Pにより示された項(α)ではなく、Qにより示された項(β)である。一旦行った「Pならばα」という推論から得られる推意αを打ち消し、それに対立するβを選択し、その選択結果を正当化するためにQを提示すると考えられる。PとQはαとβを介し逆接的關係にあるので、この類型を「逆接型」と呼ぶ。全17例中6例がこれに相当し、資料中のコーパスの内、(6)(9)(11)(13)がこれに相当する。
- ④ 例文(3)(4)(5)については、Pにより示された項(α)と、Qにより示された項(β)が同一である。「Pならばα」という推論から得られる推意α(Pによる選択結果)をさらに正当化するために、Qを提示すると考えられる。PとQは同一結論を導く關係にあるので、この類型を「順接型」と呼ぶ。全17例中11例がこれに相当し、資料中のコーパスの内、(7)(8)(10)(12)(14)(15)(16)(17)がこれに相当する。

この順接型では、α=βであるから、「Pならばα」と「Qならばβ(=α)」におけるそれぞれの因果關係の強さが問題となろう。確かに、単に結論α(=β)の根拠付けとな

る事象を重ねることによって、並列的に添加したとも考えられる。しかし、一旦「Pならば α 」という推論をした後で、更に同じ結論を導くことになる「Qならば $\beta (= \alpha)$ 」という推論を行うからには、後者の因果関係をより強いものと見るべきではないだろうか。それ故、 $Q \rightarrow \beta (= \alpha)$ の因果性によって $P \rightarrow \alpha$ の因果性を否定したということにはならないだろうか。このように考えれば、逆接型においては、 α を否定して β を選んだこと、すなわち結論を介しての逆接なのに対して、順接型においては、 $P \rightarrow \alpha$ の因果性を否定して $Q \rightarrow \beta (= \alpha)$ の因果性を選んだこと、すなわち因果性を介しての逆接とも説明できるようにも思える。しかし、因果関係の強さの存否、後者の因果性が前者の因果性を否定するかの点については、今回は疑問として残ったままである。

なお、例文(3)(4)においては、Qが直接Pを根拠付けていると捉えることができる。順接型のコーパス11例中、Qが直接Pを根拠付けていると捉えることのできる例は、他に(7)(14)(17)であり、11例中5例となる。(資料では、「Ⅲ」と示した。)

資料

	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)
逆接型	○			○		○		○				
順接型		○	○		○		○		○	○	○	○
Ⅲ		○							○			○

○は、解釈可能の意味。

- (6)BT, p. 63 (7)FG, p. 85 (8)FG, p. 101 (9)QF, p. 71
 (10)QF, p. 126 (11)QF, p. 163 (12)QF, p. 171 (13)QF, p. 186
 (14)QF, p. 215 (15)QF, p. 222 (16)CM, p. 35 (17)CM, p. 140

以上より、ATの機能について以下の仮説を立てる。

仮説：「Pの先行談話に対立項が存在し、その対立項のうちの1つが選択される。その選択結果は明示されないが、ATの後続発話Yが明示されることによって、どちらが選択されたかがわかる。」

そして、対立項の1つが選択される態様が2つに分類される。

1つは、Pによりひとまず1つの選択肢が選択されるが、次にこれが覆され別の対立項が選択されることになる。この最終的な選択肢を正当化するものとしてQが提示される類型、言い換えると、最終的選択肢はQにより正当化される類型（逆接型）である。Pの先行談話中に存在する対立項は、発話XとYの間に挿入されているATの背後に暗黙として再現していると考えられる。

逆接型 = « Il y a une opposition. P donc α . Mais β est choisi. Le choix de β est

justifié par Q. »

他方は、Pによって、1つの選択肢が選択され、これがさらにQにより根拠付けられ、最終的に当初の選択が補強・正当化される類型である（順接型）。

順接型 = « Il y a une opposition. P donc α . Et le choix de α est justifié par Q. »

3.3. 再解釈

本節では、前節で纏めたATの機能および類型を前提に、各例文を再解釈すると以下のようなになる。

例 (1) (BT)

まず、父親には、アンヌの意見に賛成する「セシルはシシルと付き合えない」と、愛する娘の自由な生活を守ることになる「セシルはシシルと付き合える」との葛藤が存在する。

この例は、逆接型であるから、まず、(P)「かわいそうなセシル」により、「セシルはシシルと付き合えない」が選択される。しかし、この選択は覆され、「セシルはシシルと付き合える」が選択される。この最終的選択が(Q)「シシルは優しい子である」により正当化される。父親は自分自身が行った最初の推論から得られた α に反駁してそれに対立する β を選択し、その選択をQによって自己説得しているとも言えよう。

即ち、引用例(1)の下線部分の父親の思考過程は、暗黙である推意の部分も含めると、次のようになる。

「可哀そうなセシル。もうシシルに付き合えないなんて。いや、付き合えるよ。『付き合える。』だって、彼は優しい子だから。」(波線部分は推意。)

例 (2) (FG)

まず、「私」には、信頼と平等の関係で付き合いたいという私の信条にそぐわない行動に対して、「これで良い」「良くない」という葛藤がある。

この例は逆接型であるから、まず(P)「彼を喜ばせたかった」から、「良くない」が選択される。しかし、この選択は覆され、「これで良い」が選択される。この最終的選択が(Q)「私の好きな映画『去年マリエンバートで』ではなく、彼の好きなウェスタン映画『ならず者一家』を観ることにしてもどうってことはない。」により、正当化される。「私」は、私自身が一旦行った最初の推論から得られた α に反駁してそれに対立する β を選択し、その選択をQによって自己説得しているとも言えよう。

即ち、引用例(2)の下線部分の「私」の思考過程は、暗黙である推意の部分も含めると、次のようになる。

「彼を喜ばせたかった。このことは、信頼と平等の関係で付き合いたいという私の信条にそぐわない。だから、良くない。いや、これで良い。『これで良い。』だって、私の好きな映画よりも、彼の好きなウェスタン映画の『ならず者一家』を観ることにしてもどうってことはないのだから。」(波線部分は推意。)

例 (3) (QF)

まず、「ジニーにとって、マーチ家に留まるより逃げた方が安全である」と「逃げるよりマーチ家に留まる方が安全である」という対立項がある。

この例は順接型である。よって、(P)「警察が悠々とジニーを逮捕にやって来ることも十分ありうる。」により、「ジニーにとって、マーチ家に留まるより逃げた方が安全である」が選択され、この選択がさらにQ「マーチ家の誰もジニーを守らない」により正当化される。

即ち、引用例 (3) の下線部分の「殺人者」の思考過程は、暗黙である推意の部分も含めると、次のようになる。

「警察が悠々とジニー逮捕にやって来ることも十分ありうる。だから、ジニーにとって、ここ(マーチ家)に留まるより逃げた方が安全である。『逃げた方が安全である。』それに、この誰もジニーを守らないのだから。」(波線部分は推意。)

例 (4) (CM)

まず、清掃作業員の服装をしたダヴィッドには、疑われるのではないかという不安感とそれに対する「疑われる」と「疑われない」という対立項がある。

この例は順接型である。よって、(P)「革の筒を見られても何か家事用具と思われる」により、「疑われない」が選択され、この選択がさらに(Q)「ニューヨークの煙突掃除人たちは、古いゴルフバックの中に伸縮式ブラシを入れて持ち歩いている」により正当化される。

即ち、引用例 (4) の下線部分のダヴィッドの思考過程は、暗黙である推意の部分も含めると、次のようになる。

「革の筒を見られても何か家事用具と思われる。だから、僕は疑われない。『疑われない。』それに、ニューヨークの煙突掃除人たちは、古いゴルフバックの中に伸縮式ブラシを入れて持ち歩いているのだから。」(波線部分は推意。)

例 (5) (DB)

まず、「彼女」には、「貸したお金を返してもらおう」と「貸したお金を諦める」の心の葛藤・対立項が存在する。

この例は順接型である。よって、(P)「後になって、彼女は諸島への旅行を極めてギリシャ哲学的に考えた。」により、「貸したお金を返してもらおうのを諦める」が選択され、この選択がさらに(Q)「貸したお金を返してもらえないことはそれ程大したことではない」により補強・正当化される。

従って、引用例 (5) の下線部分の思考過程は、暗黙である推意の部分も含めると、次のようになる。

「後になって、彼女は諸島への旅行を極めてギリシャ哲学的に考えた。だから、彼女は貸したお金を諦める。『お金を諦める。』それに、貸したお金を返してもらえないことはそ

れ程大したことではないのだから。」(波線部分は推意。)

3. 4. AT の分析のまとめ

AT の機能：

「AT は、X (P) の先行談話に対立が存在する場合に用いられる。対立する選択肢の内の1つが選択され、その選択結果は明示されないが、後続発話 Y によって理解される。AT は、後続発話 Y によって、その選択結果を暗示させ正当化させるという機能を持つ。」

なお、順接型の幾つかは、Y (Q) が α を介さずに直接 X (P) を根拠付けることが可能であることから、わざわざ $\alpha\beta$ を介して AT を説明することは迂遠又は牽強付会であるという指摘もあるであろう。しかし、順接型においてさえ、この反論は全部の用例には当てはまらない。しかも、 $\alpha\beta$ を顕在化させることによってこそ、問いに対する答えを暗示する AT の機能を明らかにできたのである。さらに、AT の前後で逆接的關係と順接的關係の2類型があるため、これらの現象を統一的に説明するためには $\alpha\beta$ の媒介が不可欠である。

また、再言するに、3.1. で示した問い・対立項・経験則・推意 α ・推意 β の具体的内容については、当該具体的文脈ないし談話においては自と一定の範囲に限定される。その意味で、当該具体的文脈ないし談話においては、本稿で示したものと類似の具体的問い・対立項・経験則・推意 α ・推意 β は代入可能であろう。しかしながら、それらは文脈や談話と独立して想像されるべきものではない。それ故、他にどのような問い・対立項・経験則・推意 α ・推意 β が代入されても同質的な内包に帰着すると思われるから、例文の横断的観察、機能の抽出の方法によれば同一の結論に至ることになる。

このように AT の機能を理解すれば、後続発話を選択結果を示すことから、一件落着・締めくくり・解決・結末・最終意見を示すことに繋がる。また、AT が選択結果を非明示のままにしてしまうことから、葛藤、逡巡した話者・筆者の情緒的な自己説得・自己納得の場面とも親和性がある。

4. 先行研究を振り返る

筆者は、川北 (2003) で AT の先行研究を詳細に検討した。それぞれの先行研究の説を再度振り返ることによって、本稿で提示した研究方法による結果と比較してみる。

(1) Brockway (1982:20) の「AT は論証の前提となる命題を表す発話のみを導入でき、結論部分を表す発話を導入することはできない」という見解は、本稿の「Y (Q) による正当化」という見解と、矛盾しないであろう。しかし、「X (P) の先行談話内の対立項とその一方の選択、その選択結果の Y (Q) による暗示」という点は、Brockway (1982) では言及されていない。

(2) Roulet (1987:134, 1990:337) の「発話者による新たな視点は、視点変更や意見変更の結果であり、その新たな視点は先行する視点とは逆の視点である」という説は、次

の点で理解しがたい。本稿の主張では、先行談話内に対立項が存在するので、Y(Q)が導入する視点は対立項の内のどちらかと同一であるから、必ずしも先行する視点とは逆であるとは言えない。また、「Y(Q)による選択結果の暗示と正当化」については、Roulet (1987, 1990) では言及されていない。

(3)Nøjgaard (1992) は「多声的機能を持つ」という指摘をしているが、本稿の「逆接型」のATは「X(P)により一旦RE 1を参照しながらも、その結果得られる推意 α を否定し β を選び、その選択をY(Q)で正当化する」というものである。「多声的」とあるとも言えるかもしれない。また、Nøjgaard (1992) の「説明的機能を持つ」という指摘は、本稿の「Y(Q)による選択結果の正当化」という点と通じるものがあるだろう。しかし、「X(P)の先行談話内の対立項の存在、その選択結果のY(Q)による暗示」という点については、Nøjgaard (1992) では言及されていない。

(4)Grieve (1996) の「前件に確認を与える事実を導入する」という見解は、本稿の「順接型」のATにおいて「選択結果をY(Q)が更に正当化する」という点と矛盾しない。しかしながら、「X(P)の先行談話内の対立項の存在、その選択結果のY(Q)による暗示」については、Grieve (1996) では言及されていない。

(5)Rossari (2005) は、mais や car 等の様々な解釈を持ちうるATを統一的に説明するために、「ATが発話の方向転換 renversement énonciatif を示す」という見解を提示している。この点については、本稿の主張の「逆接型」ATが、「一旦RE 1を参照した結果得られる推意 α を否定し β を選ぶ」という点と共通すると思われる。「順接型」についても、「 $P \rightarrow \alpha$ 」と一旦推論し、更に「 $Q \rightarrow \beta (= \alpha)$ 」と推論していることから、同じ結論に対し別の観点から述べていることになるので、発話の方向転換なるものが行われていると考えることができるかもしれない。また、Rossariの「ATはXとYを直接関係付けているのではなく、発話の方向転換によって関係付けられている」という主張は、本稿の主張の「Y(Q)がX(P)を直接根拠付けている」という捉え方ではなく、X(P)とY(Q)が α と β を媒介にして関係付けられている」という見解と矛盾しないであろう。しかしながら、本稿の「X(P)の先行談話内の対立項の存在、その選択結果をY(Q)が暗に示し、正当化する」という点については、Rossari (2005) では言及されていない。

5. 終わりに

前章で検討したように、先行研究において各論者はそれぞれの見解を述べており、それぞれの見解はATの一面を説明するにとどまり、それ故、それぞれが他の論者の意見を補充する形にとどまり、ATの機能の全容を説明していない。しかも、ATの様々な用例について横断的に説明できるには至っていない。これは、各論者が自らの直感とそれを説明できる例を提示し分析過程の推意を自明のものとして自らの主張を構築していくという手法に則っているからであり、現象を素直に受け止め、分析するという初歩的な姿勢を侮った結果といえるのではないだろうか。今回示したように、ある一定のコーパスの中に出現する用例全てを中立的かつ明確な手順に従い、当然皆に共有されていると思込まれて

いるか、又は没却されていた推意を明示する分析方法によってこそ、各連結詞の機能研究において、部分的な機能の解明に満足せず、その全容を解明することができると思われる。

今後は、他の類似する連結詞の考察、連結詞相互の比較対照を行うことにより、さらに各連結詞の相違を解明する必要がある。

注

- (1) これらの研究については、Rossari & Paillard (2005)を除いて、川北 (2003) で論じている。この論文についてはその後入手したためここでは扱っていないので、詳細は稿を改めて述べることにするが、これも他の先行研究と同様の問題点がある。ここでは、『après tout は un renversement énonciatif (発話の方向転換) を示し、これによって様々な解釈が生じる』という見解が述べられている。
- (2) 本稿における分析の出発点が推意であることから、関連性理論との関係に疑問を持たれる読者もおられよう。確かに、推意を媒介に連結詞の機能を明らかにするという試みの点では共通する。しかし、本稿の立場は、特定の言語学的理論からアプローチするものではなく、また、一般的言語理論の構築を目的とするものではない。本稿は、意味・機能研究において、従前、漫然と行われてきた基礎資料としての推意の分析方法について明らかにしようとしたものに過ぎない。また、本稿は各論であり、個々の連結詞の具体的な機能を明らかにしようとするものであって、言語一般に共通の法則の発見などを目的とするものではない。従って、本稿の立場は、射程及び目的の観点から関連性理論とは異なる。
- (3) 新聞等もコーパスとして適切であろう。但し、その場合も、ある一定の母集団を設定し (例えば2005年8月の新聞全て、というように一定の母集団を設定し)、その中の全ての例を観察し、その分析結果を示すことが必要である。
- (4) Rossari (2000 : 34)
- (5) BT=Françoise Sagan (1954) : *Bonjour tristesse*, Julliard.
 FG=Annie Ernaux (1981) : *La femme gelée*, Folio.
 QF=Brigitte Aubert (1992) : *Les quatre fils du Dr March*, Editions du Seuil, Collection Points.
 CM=Serge Brussolo (1994) : *Le Chien de Minuit*, Le Livre de Poche.
 DB=Camille Laurens (2000) : *Dans ces bras-là*, P.O.L.
- (6) 「推論」は、前提が真ならば必ず結論も真である「論理的推論」のみならず、日常の一般的推論も含めている。例えば、「道路が濡れているならば、雨が降ったのだ」という推論は、非論理的であるが、このような因果関係を遡行して、原因から結果を推論する「仮説形成」もここでは含めている。「経験則」はDucrot (1988) の topos と似ているが異なる。「経験則」は、トポスの特徴 (①共有性②一般性③段階性) の内の「段階性」は持たない、また「経験則」は無数にあり、適用される経験則は、文脈や言語外情報によって決まるものであり、述語の内部で規定されるのではない。推論、経験則についての詳細は、川北 (2004) 参照。
- (7) 「X. AT Y.」を基本文型と仮定し、ヴィルギユルとピリオドには差異が無いものとして扱っている。実際には「X. Y AT.」という語順もあるが、この場合は、「X. AT Y.」の語順に変更しても意味が不変ということをネイティブチェックした上でXおよびYが何に当たるかを示した。また、XおよびYは、主体の発話とは限らず思考の場合もある。
- (8) ある発話 (思考) Xは、先行する発話 (思考) を受けてつながっており、連鎖しているものなので、1つのXは先行談話や文脈、発話状況や言語外情報を背景としてなされている。従って、あるXの表意Pは、発話状況・言語外情報・当該発話に至るまでの文脈ないし談話を考慮して、指示対象の同定・省略表現の補足を行って特定される。
- (9) 具体的文脈が与えられた場合に、日仏人とも同様の経験則が適用されるであろうという仮定の下に、具体的推意を明らかにしていった。筆者は、自分の推論過程をフランス人数名に開示したと

- ころ、経験則の選択において、著しい乖離がなかったことを確認している。
- (10) 文と文の関係を示す接続詞の分類に関しては様々な見解があり、本稿での取り扱いには異論もあろうが、本稿では、順接的と逆接的に大きく2分類して考察する。ここでの『順接的』とは、話の筋が理屈の上で順序よくつながり、「だから」「なぜなら」で表される因果関係および「それに」「しかも」などの添加的・補足的関係を含めている。また、『逆接的』とは、前件から予測される事柄が後件において実現されない関係にあり、「しかし」や「ところが」以外に対立関係も含めている。
- (11) *Bonjour tristesse* : p. 71, 83 を除外。
- (12) *Bonjour tristesse* : p. 79, 85, *La femme gelée* : p. 20, *Dans ces bras-là* : p. 125 を除外。
- (13) 紙幅の都合上、全てを本稿で扱うことは出来なかったため、各小説から1例ずつ具体的に扱い、その他12例については例文の出現する箇所とその類型を資料として示した。

参考文献

- ANSCOMBRE, J.-Cl. (1995) : *Théorie des topoï*, Kimé.
- BLAKEMORE, D., (1987) : *Semantic Constraints on Relevance*, Basil Blackwell
- BLAKEMORE, D. (1992) : *Understanding Utterances*. Oxford : Blackwell. 武内道子, 山崎英一訳
(1994) 『ひとは発話をどう理解するか』 ひつじ書房
- BROCKWAY, D., (1982) : Connecteurs pragmatiques et principes de pertinence, *Langages* 67, pp. 7-22
- DUCROT, O. (1980) : *Les mots du discours*, Minuit.
- GRIEVE, J., (1996) : *Dictionary of Contemporary French Connectors*, Routledge
- JAYEZ, J., (1983) : La « conclusion » : pour quoi faire ?, *Sigma* 7, pp. 1-47
- LUSCHER, J.-M. (1994) : “Les marques de connexion : des guides pour l’interprétation” in MOESCHLER, et als. (éd), *Langage et pertinence*, Presses Universitaires de Nancy, pp. 175-227.
- MOESCHLER, J. & REBOUL, A. (1998) : *Pragmatique du discours*, Armand colin.
- NØJGAARD, M., (1992) : *Les adverbes français - Essai de description fonctionnelle*, Tome1, Munksgaard
- ROSSARI, C. (1997) : Les opérations de reformulation - *Analyse du processus et des marques dans une perspective contrastive français-italien* -, Peter Lang.
- ROSSARI, C. (2000) : *Connecteurs et relations de discours : des liens entre cognition et signification*, Presses Universitaires de Nancy.
- ROSSARI, C. (2002a) : “Mais que sont donc les mots du discours ?”, in CAREL, M. (éd.), *Les facettes du dire hommage à Oswald Ducrot*, Paris, Kimé, pp. 283-296.
- ROSSARI, C. (2002b) : “Les adverbes connecteurs : vers une identification de la classe et des sous-classes”, *Cahiers de linguistique française* 24, pp. 11-43.
- ROSSARI, C. & PAILLARD, V. (2005) : “Après tout : une forme de temporalité énonciative”, *Cahiers Chronos* 15, pp. 88-101.
- ROULET, E. (1987a) : “Complétude interactive et connecteurs reformulatifs”, *Cahiers de linguistique française* 8, pp. 111-140.
- ROULET, E. (1987b) : “Approche pragmatique de quelques locutions adverbiales données comme synonymes par les dictionnaires du français contemporain”, *Cahiers Ferdinand de Saussure* 41, pp.177-184.
- ROULET, E. (1987c) : “L’intégration des mouvements discursifs et le rôle des connecteurs interactifs dans une approches dynamique de la construction du discours monologique”, *Modèles linguistiques* 17, pp.19-31.
- ROULET, E., (1990) : Et si, *après tout*, ce connecteur pragmatique n’était pas un marqueur d’

- argument ou de prémisses impliquées ?, *Cahiers de linguistique française* 11, pp. 329-343
- SCHELLING, M. (1982) : "Quelques modalités de clôture : les conclusifs FINALEMENT, EN SOMME, AU FOND, DE TOUTE FAÇON...", *Cahiers de linguistique française* 4, pp. 63-106.
- WINOGRAD, T. (1980) : "What does it mean to understand language ? *Cognitive Science* 4-3, Reprinted in D. Norman (ed.), *Perspectives on Cognitive Science*, Ablex and Erlbaum Associates 1981, pp. 231-264.
- 市川伸一 (1997) : 『考えることの科学』 中央公論新社刊
- 大坊郁夫・安藤清志・池田謙 (編) (1989) : 『社会心理学 パースペクティブー個人から他者へ』 誠信書房
- 大坊郁夫・安藤清志・池田謙 (編) (1989) : 『社会心理学 パースペクティブー人と人とを結ぶとき』 誠信書房
- 川北恭子 (2003) : 「Connecteur の機能解明のための方法論上の問題点 - après tout の分析を通じて -」 『études françaises』 36, 大阪外国語大学フランス語研究室, pp. 1-17.
- 川北恭子 (2004) : 「連結詞研究の方法論を求めて」 『森本英夫先生古希記念『周辺』『TLLMF』合併号』 シメール社, pp. 39-50.
- 坂原茂 (1985) : 『日常言語の推論』 東京大学出版会
- 佐治圭三 (1970) : 「接続詞の分類」 『月刊文法』 2-10, pp. 28-39.
- 末永俊郎・安藤清志 (編) (1998) : 『現代社会心理学』 東京大学出版会
- 武内道子 (2000) : 「論理形式と表意」 『英語青年』 第146巻7号, pp. 17-19.
- 辻幸夫 (編) (2001) : 『ことばの認知科学辞典』 大修館
- 中村雄二郎 (1993) : 『共通感覚』 岩波書店
- 西阪仰 (2001) : 『心と行為 - エスノメソドロジーの視点 -』 岩波書店
- 東森勲, 吉村あき子 (2003) : 『関連性理論の新展開 - 認知とコミュニケーション -』 研究社, 松井智子 (2000) : 「指示表現の解釈と関連性」 『英語青年』 第146巻7号, pp. 19-21.
- 山梨正明 (1992) : 『推論と照応』 くろしお出版

(2006. 10. 12 受理)